

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

山中仁吉

## 【所属】(助成決定時)

北海道大学

## 【研究題目】

近代日本女性参政権運動における政治的連合のゆくえ

## 【研究の目的】(400字程度)

戦前日本において女性参政権の獲得を目指した指導者として市川房枝の名は知られている。既存の日本女性参政権運動(とその戦前における失敗)の研究では、市川などの運動家や婦選獲得同盟(以下、同盟)といった団体の個別の動きや役割が検討されてきた。しかし、近年の欧米女性参政権運動の研究では、男性政治家が、多くの女性が支持する女性参政権実現後に新たな有権者(女性)からの集票に期待し女性参政権を容認することが、女性参政権の実現には重要である、と指摘されている。こうした政治家や他の政治勢力との連携に関して、市川らの運動は、無産階級の運動との連合に失敗し、一般女性の支持を得られなかったという評価もある。しかし、かかる評価は必ずしも内在的な検討を経ていない。市川自身は社会主義運動との連携に慎重でありながら、運動全体では連携が模索されていた事実は無視しえない。

本研究は、女性参政権運動が活発でありながら 20 世紀前半の日本においてなぜ女性参政権が実現しなかったのかを、市川などの運動家や団体の個性ではなく、諸政治勢力の連合の模索から分析する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究の問いに対して、女性参政権運動と(a)無産階級の運動との連合、(b)政治家との連合という二つの観点から検証を行う。その際に分析対象とするのは、関東大震災後に救援活動のために結成された東京連合婦人会(以下、婦人会)、とりわけその政治部である。婦人会は、日本初の女性参政権運動とされる新婦人協会解体後に分裂状態であった女性運動の「大同団結」を意図して、日本キリスト教婦人矯風会(以下、矯風会)を中心に設立された団体で、その政治部は女性参政権運動の主流派となる同盟へと発展する。社会主義者を含む多様な人物や団体が集った婦人会では、緊張やその調整の様子が顕著にあらわれるだろう。婦人会の設立は、女性参政権運動の再編されていたこの時期を象徴する出来事であった。

分析に際しては、婦人会政治部の構成員やそれと競合しうる政治勢力が、女性参政権(運動)に対する自己の立場をどのように正当化しようとしたのかに着目し、その発信を女性参政権運動における勢力関係を変更する試みと捉えた。(a)を分析の中心に据え、(b)は運動側の戦略の選択に関わる限りで補完的に検討した。

そこで史料については、基礎的な史料となる運動家の日記や書簡だけでなく、新聞雑誌で発表された論説や団体のパンフレット類などを幅広く収集した。具体的には、市川房枝記念会女性と政治センター婦選会館と矯風会館資料室に訪問し、そこに収蔵されている婦人会と矯風会に関連する人物の書簡・日記、内部資料、パンフレット類など未公開史料を調査した。また、婦人会機関誌『連合婦人』や矯風会機関誌『婦人新報』をはじめとした新聞雑誌に掲載された団体関係者の論説を国立国会図書館を中心に調査し収集した。とりわけ政治家については、新聞雑誌や政党機関誌だけでなく、帝国議会会議も参照した。加えて、女性参政権運動家に関わる日記や書簡は必ずしも多くが残されているわけではないので、自伝や回想・回顧録も積極的に渉猟した。

## 【結論・考察】(400字程度)

本研究を通じて、従来十分に検討されていなかった関東大震災前後の女性参政権運動を、東京連合婦人会(と

その政治部)の設立過程を中心に分析することで、戦前日本においてなぜ女性参政権が実現しなかったのかという問いの一端に迫った。新婦人協会の解体によって、女性参政権運動の星雲状態が招来した。その後運動の連合を目指して婦人参政同盟(新婦人協会の後身団体の婦人連盟が中心にいた)が誕生するが、当初松本君平を通じて革新倶楽部に系列化され、それゆえ政党に忌避感を抱く人々を取り込み切れなかったと考えられる。救護活動で実績をあげ人的ネットワークを構築した婦人会政治部を母体に成立した同盟は、「政党政派に対して絶対的中立の立場」を標榜することで、多くの女性を糾合しえたと言える。本研究は、政党内閣期までの女性参政権運動における諸勢力の布置を明らかにすることができた。

今後、本研究の成果を踏まえて、政党内閣期における女性参政権運動(それは主流派である婦選獲得同盟以外の他の団体の活動や団体相互の関係を含む)を検討することで、戦前日本における女性参政権運動の総体的な解明を進めていきたい。